

# ラインナップ識別後の目撃者に対する 肯定的フィードバック効果の検討

福島由衣<sup>1</sup> 伊藤令枝<sup>2</sup> 室井みや<sup>3</sup> 巖島行雄<sup>4</sup>

(<sup>1</sup> 日本大学大学院文学研究科, <sup>2</sup> 日本大学理工学部, <sup>3</sup> 兵庫医科大学,  
<sup>4</sup> 日本大学文理学部)

キーワード：識別後フィードバック効果, ラインナップ, 確信度

冤罪が起きる原因としてRattner(1988)はその誤判研究のなかで、誤った告発に最も寄与したエラーに目撃者の誤識別をあげている。これは、彼が調べた205件の事例のうちの約半数である100件を占めていた。また、DNA鑑定によって冤罪証明を行っている非営利活動機関イノセント・プロジェクト(<http://www.innocenceproject.org/>)によると、彼らの活動で無実が証明された元受刑者の75%は誤った目撃者識別によって有罪判決を受けていたという。

目撃者の記憶が誤る原因には様々な要因が関与していることが明らかにされてきているが(例えば、巖島、仲、原(2003)を参照のこと)、犯罪場面を写した動画を見た後に、ラインナップから犯人の識別を終えた参加者の選択に対してフィードバックを与える研究が行われている。確証を与えるフィードバック(「いいでしょう、犯人を選びましたね」)を受けた参加者(以下確証的フィードバック; **confirming feedback**)は、非確証的フィードバック(「本当は、\_\_番が犯人なんですよ」)を返された参加者(以下非確証的フィードバック; **disconfirming feedback**)や、フィードバックを受けなかった参加者(以下統制条件; **no-feedback**)に比べ、自身の識別に対する高い確信度や、裁判での証言をより快諾しやすくなるという傾向があることが報告された(Wells & Bradfield,1998)。Wells and Bradfield (1998)が用いた記憶テストには、記憶に対する確信度だけではなく、犯人の顔がどれくらい良く見えたか、どれくらいの時間見えていたか、ビデオから犯人までの距離、判断の難易度なども含まれていた。実験では、ラインナップ識別で選択をした参加者全員が間違ふよう

な手続きが採用され、実際に参加者全員が写真識別を行ったのにも関わらず、これらほとんどの設問に対して非確証的フィードバック条件と統制条件よりも確証的フィードバック条件の記憶に対する評価が有意に高かった。このように、確証的なフィードバックが与えられることで、参加者が記憶の正確さへの確信度を高めたり、実際に目撃した映像よりも鮮明だと報告したり、詳細になる現象は識別後フィードバック効果(**post-identification feedback effect**; 以下フィードバック効果)と呼ばれている。

## これまでの識別後フィードバック効果研究

フィードバック効果は様々な方法で検証されているので、代表的なものをいくつかここに紹介しておく。Semmler, Brewer and Wells (2004)では、確証を与えるフィードバックとして「この実験には87名の方に参加して頂いていますが、うち84名の方はあなたと同じ判断でしたよ」という、参加者の社会的同調を促すようなフィードバックを用いており、フィードバック効果は、参加者と同じ回答をした人数が多いと知らされた場合、少ないと知らされる条件よりも強く表れた。Skagerberg and Wright (2009)では、情報源となる人物の信頼性を操作する事でも同様に参加者の確信度に影響を及ぼす事ができると示した。

一方で、このフィードバック効果を抑制する方法も検討されている。例えば、Lampinen, Scott, Pratt, Leding and Arnal (2007)の研究では、識別後の質問紙に回答する前に、与えられたフィードバック信用出来ないという内容の警告をコンピューターの画面上に呈示した。その結果、この警告を受けた参加者は、警告文を呈示されなかった群

に比べてフィードバックの影響を受けなかった。また、フィードバックを与えた人物の真意を尋ねられたりした場合でも、フィードバック効果が中和されてしまうこともある(Neuschatz, Lawson, Fairless, Powers, Neuschatz, Goodsell & Toglia, 2007)。

以上のようなフィードバック効果はなぜ起こるのであろうか。Charman, Carlucci, Vallano, and Gregory(2010) は, Bradfield, Wells and Olson (2002)の手がかり仮説を発展させて、フィードバック効果を説明する選択的手がかりフレームワーク(the selective cue integration framework)を提案した。このフレームワークは大きく3段階に分けられ、どのように確信度が決定されていくかの道筋を示している。その第一段階は査定段階(the assessment stage)と呼ばれる。この段階で自らの識別に強い確信を持っている限りは、外的手がかりに頼る必要はないとしている。確信度とは評価を求められてから決定されるものではなく、あらかじめ参加者がある程度持っているものであるが、評価を求められる前であれば識別後に起きた出来事(例えばフィードバック)を評価に取り入れる事が可能である。しかし、すでに高い確信度を持っている参加者は後に来る情報に影響されにくく、外的手がかりを必要としないが、確信度が低い場合は外的手がかりに頼らざるを得なくなる。そこで第二段階、検索段階 (the search stage) に移行する。ここでは外的手がかりを精査するが、その基準として Charman ら (2010) は、人は自らの以前の行動を正当化する傾向にあるとする、フェスティンガーの認知的不協和理論を引き合いに出している。つまりこの段階では、自分の信念を支持する情報(識別があっていたと言われた)を受け入れ、信念を支持しない情報(識別は間違っていた)は吟味され、この信念と合わない外的手がかりは確信度評価に取り入れられない。そして最後の段階である評価段階 (the evaluation stage) では、得られた外的手がかりの信頼性を検証する。手がかりの信頼性が高いと評価されれば、その外的手がかりは確信度評価に統合されるが、手がかりの信頼性を否定するような情報がある場合、そ

の外的手がかりは確信度評価に統合されない。このフレームワークに基づけば、外的手がかりが確信度評価に統合されないケースなども理論的な説明が可能である。

本研究ではフィードバック効果を最初に検討した Wells and Bradfield (1998)の実験を異なる刺激を用いて追試し、得られた結果を Charman ら(2010) のフレームワークの諸段階に照らし合わせてどのような説明が可能か検証する(実験1)、その後、フレームワークの質的な検討を行うため、半構造化面接を用いたフィードバック効果の実験を行う(実験2)。

## 実験1

### 実験参加者

122名(確証的フィードバック条件40名、非確証的フィードバック条件41名、統制条件41名)が参加した。

### 実験計画

フィードバック(確証的フィードバック条件 / 非確証的フィードバック条件 / 統制条件)を要因とした1要因3条件の参加者間計画とした。

### 実験材料

1分程度のビデオ(置き引きの犯罪場面)と男性の写真5枚をラインナップとして用いた。ラインナップの写真の中に、ビデオに出てくるターゲットは存在しなかった。記憶課題には Wells and Bradfield(1998)で用いられたリッカート法による7段階尺度の記憶課題を翻訳し、これを用いた(11問)。

### 手続き

実験は1人ずつ実験室で行った。参加者は確証的フィードバック条件、非確証的フィードバック条件、統制条件のうちの一つに分けられた。参加者にはまず「これからビデオを見て頂き、その後でビデオに出てくる人についての質問に答えて頂きます」と教示し、ビデオの内容をあらかじめ知らせた。ビデオ呈示後、ラインナップを呈示し、ターゲットを選択してもらった。この際「いない」と回答する事も可能である事を参加者に伝えたが、出来るだけ識別するまで待った。識別後確証的フィードバック条件には「正解です、よくわかりましたね」、非確証的

フィードバック条件には「残念、本当は\_\_番が正解なんです」というフィードバックを与え、統制条件には何もフィードバックを与えなかった。そして全参加者に記憶テストの回答を求め、デブリーフィングを行った。

### 結果

各質問の得点の平均値と標準偏差を Table1 に記載した。フィードバックの種類を要因とする、1 要因 3 水準の分散分析を行った結果、10 問中、「どれくらいよく犯人の特徴をビデオから掴む事が出来ましたか？」(以下「特徴」) ( $F(2,119) = 4.19, p < .05$ ), 「ビデオを見ている間どれくらい犯人に注目していましたか？」(以下「注目度」) ( $F(2,119) = 3.47, p < .05$ ), 「写真から犯人を識別するのは、どれくらい簡単、あるいは難しかったですか？」(以下「難易度」) ( $F(2,119) = 4.86, p < .05$ ), 「あなたの犯人の記憶に基づいて、あなたが識別した人物について、どれくらい裁判で証言してもいいと思いますか？」(以下「裁判」) ( $F(2,119) = 5.17, p < .01$ ), 「犯人を選ぶのに、どれくらい十分な情報を得られたと感じましたか？」(以下「情報」) ( $F(2,119) = 3.85, p < .05$ )の5つの質問においてフィードバックの主効果が得られた。LSD 法を用いた多重比較の結果、「特徴」では確証的フィードバック条件と非確証的フィードバック条件との間に ( $MSe = 1.07, p < .05$ ), 「注目度」では確証的フィードバック条件と統制条件との間に ( $MSe = 1.43, p < .05$ ), 「難易度」と「裁

判」では確証的フィードバック条件は非確証的フィードバック条件、統制条件の両者との間に有意差が得られた ( $MSe = 1.31, p < .05$ ;  $MSe = 1.52, p < .05$ )。「情報量」では非確証的フィードバック条件と確証的フィードバック条件の間に有意差が認められた ( $MSe = 1.36, p < .05$ )。

全体的にこの結果は Wells and Bradfield (1998) の結果を支持し、Charman ら (2010) のフレームワークを裏付けるものと考えられる。つまり、識別を行った後、評価を求められる前であれば、実験者が参加者に与える外的手がかり(フィードバック)は確信度評価に統合されるということである。しかし、参加者の信念に合わない手がかり(非確証的フィードバック)は確信度評価を低下させたのである。

### 考察

確証的なフィードバックを受けた参加者は、5つの記憶テスト項目で有意に自らの記憶の質を高く見積もったことが示された。これは Wells and Bradfield (1998) を支持する結果であり、Charman ら (2010) のフレームワークに則って説明することが可能である。以下このフレームワークに従って説明すれば次のようになる。正棄却率の低さ(125名中3名)から、本研究の参加者達はフレームワークの査定段階では内的手がかりが弱かったために、検索段階で利用可能な外的手がかり(フィードバック)に頼って回答を行ったと考えられる。さらに、参加者のほとんどが大学の学部生であり、実験

Table 1  
各条件ごとの質問項目別平均得点

質問項目	確証的フィードバック条件	非確証的フィードバック条件	統制条件
見え方	4.22 (1.27)	3.51 (1.45)	3.82 (1.32)
特徴	3.65 (1.19) <sup>a</sup>	3.00 (0.88) <sup>b</sup>	3.19 (0.96)
距離(m)	11.47 (4.78)	10.09 (4.01)	10.53 (3.51)
注目度	5.57 (1.32) <sup>a</sup>	5.14 (1.11)	4.87 (1.10) <sup>b</sup>
確信度	3.22 (1.68)	2.56 (1.28)	2.58 (1.48)
難易度	2.60 (1.35) <sup>a</sup>	1.95 (1.08)	1.87 (0.91) <sup>b</sup>
識別時間	3.25 (1.63)	3.31 (1.47)	3.19 (1.45)
裁判	2.72 (1.51) <sup>a</sup>	1.85 (0.92)	2.17 (1.14) <sup>b</sup>
他人の証言	3.47 (1.43)	2.97 (1.17)	3.21 (1.38)
情報量	2.60 (1.13) <sup>a</sup>	2.07 (1.02) <sup>b</sup>	2.75 (1.28) <sup>a</sup>
全体	3.48 (1.67)	2.93 (1.52)	3.08 (1.51)

※標準偏差値は括弧内に記した。全体の平均得点は「距離」を除く。異符号間に有意差あり ( $p < .05$ )

者が大学院生であったことから、評価段階で吟味される情報源の信頼性も保たれていたといえよう。また、設問に対する平均点がやや低いのは特徴的である。例えば確証的フィードバック条件の「確信度」の平均値は7段階評価で3.22という評価であった。全体的な平均値が低いことや前述の正棄却率の低さから、本実験の参加者は Charman ら (2010) のフレームワークの査定段階において潜在的に持っていると思われる確信度が低かったため、検索段階で外的手がかりを受け入れやすくなっている状態であったと考えられる。しかし、確証的フィードバック条件全体の平均値が 3.48 であることを考慮すると、検索段階で吟味される外的手がかりであるフィードバックも確信度を底上げするにはそれほど強いものではなかったと推測される。

## 実験2

実験2では、Charman ら(2010)のフレームワークの質的な検討を行うため、フィードバックだけでなく設問と回答も口頭で行う。そこで、次の3点を本実験の探索的な検討課題として挙げる。(a)設問と回答を対人方式によって行った場合、フィードバックの効果はより強くなるのか、あるいは弱くなるのか、(b)フィードバックを与えられた条件と与えられなかった条件で報告内容に質的な差は見られるのか、差があるとしたらどこに差異があるのか。(c)実験2の結果は Charman ら(2010)のフレームワークで説明が可能か。

### 実験参加者

34名(フィードバックあり条件18名、フィードバックなし条件16名)が参加した。

### 実験計画

フィードバックの有無を要因とする1要因2水準の参加者間計画であった。

### 実験材料

実験1で用いたのと同じ置き引きのビデオを参加者に視聴させた。質問は実験1で用いた Wells and Bradfield (1998) の記憶テストを基準に作成し、口頭で質問を行い、回答は録音した。ただし、実験2ではフィードバックが参加

者に影響を与えていたかを確認する質問を行った。

### 手続き

まず参加者が実験室の席に着いた後、実験者は動画視聴後の質問と回答を録音することについての承諾を求めた。承諾を得られた参加者には、個人情報や録音内容の扱いに関する説明をした後、承諾書へサインを求めた。その後の手続き、教示は実験1とほぼ同じであったが、回答はそれぞれの質問に対して「なにが、どの程度」など、出来るだけ具体的な回答をするように求めた。その他に異なる点はフィードバックあり条件に与えたフィードバックの内容(「ああ、やっぱり当てられますね。正解です。中には間違える人もいますよ」と、質問と回答を口頭で行いそれを録音したこと、そしてフィードバックあり条件への質問に1項目(「今回、私は選んで頂いた写真について、「あっています」と言ったのですが、このことは今答えて頂いた質問の回答に影響しましたか)を追加した3点であった。

## 結果

録音で得られたデータはすべて、実験者の主観が入らないよう、実験目的を知らない第三者に依頼して質問ごとに要点を書き起こすよう求めた。 $\chi^2$ 検定を記憶テスト9問に対して行い、その結果、「注目度」と「顔」において両条件間の差が有意であった( $\chi^2(3) = 12.86, p < .05$ ;  $\chi^2(3) = 8.66, p < .05$ )。  $\chi^2$ 検定を行った9問全体では  $\chi^2(3) = 1.85, p = .66$  であった。フィードバックが回答に影響したかどうかの質問に対して、「影響した」と回答したのはフィードバックあり条件18名中12名であった。「距離」「特徴」の2問に対しては具体的な数値を求めたのでその平均値に対して  $t$ 検定をおこなったがどちらにも有意差は見られなかった( $t(22.96) = 0.07$ ;  $t(32) = -0.83$ )。前述した検討課題(a)~(c)は、考察にて検討する。

## 考察

検討課題として前述した(a)~(c)について以下に記述する。

(a)設問と回答を対人方式によって行った場合、フィードバックの効果はより強くなるのか、あるいは弱くなるのか：フィードバックあり条件となし条件間の統計的な有意差は個別の2問（「注目度」と「顔」）を除いて得られなかった。このことから、フィードバックの効果は質問紙を用いて回答を求めた時よりも弱まったといえよう。また、Semmlerら(2004)と同じように、他の大多数の参加者と同じ回答であったと暗示する、情報源の信頼性を高めたフィードバックも効果を高めることはなかった。質問方法による差が出た理由として、回答をする相手が質問紙ではなく実験者であったことがまず考えられる。質問紙ではその場で回答を見られることはなく、時間的圧力もなく自分のペースで回答を進めたり考え直したりすることが容易に出来る。だが、口頭で自らの記憶に対する評価を報告しなければならない場合には、参加者は常に自らの回答を「待っている」実験者と対面しているだけでなく、その判断について訊き返される可能性がある。そのために、報告の正確性について聞き返されないように、実際よりも低い当たり障りのない回答を好んだこともフィードバックの効果を弱めた一因であると推測される。

(b)フィードバックを与えられた条件と与えられなかった条件で報告内容に質的な差は見られるのか、差があるとしたらどこに差異があるのか：両条件の統計的有意差は得られなかったが、条件によって参加者の答え方の姿勢に違いがみられた。たとえば、フィードバックなし条件は「正面からはぜんぜん見えなかった。後ろとか斜めからしか見えなかった」などというように、一貫して否定的なのに対し、フィードバックあり条件では「顔はぜんぜん見えなかった。後ろ姿は見えた。映像としてはそれなりに鮮明に見えた」と否定的ではあるが、映像としては「鮮明に」や「よく（見えた）」という言葉を使って肯定的な側面をみせた参加者が4名いた。この報告については両条件とも要点は確かに「顔はぜんぜん見えなかった」なのだが、両条件の回答にはこのような姿勢の違いが見られた。本実験ではこのような参加者の報告に

対して深く追求することはしていないが、聞き手の推測や促しによっては報告が変化していく可能性もあるといえよう。

(c) 実験2の結果はCharmanら(2010)のフレームワークで説明が可能か：(a)で述べた参加者が実験者から感じる対人圧力の影響はCharmanら(2010)のフレームワークでは説明がつかない。フレームワークの査定段階では外的手がかりの信頼性が吟味され、それを確信度に取り入れるか否かが検討される。このフレームワークで重要とされているのはあくまで手がかりの情報源とその内容であるが、手がかりを与えられる環境の圧力までは考慮されていない。一方で、強い内的手がかりを持たない参加者は、検索段階で外的手がかりに頼らざるを得なくなるとされているが、この点については実験参加者の報告によって彼らのフレームワークの裏付けがされた。実験参加者Aはフィードバックが回答に影響しているかを尋ねた質問に対して「はい」と答え、回答するにあたっての考え方として、「不安ながら選んで、あつてって言われた安心感からものを見て」と報告した。つまり、内的手がかりがない状況で外的手がかり（フィードバック）が質問に回答する手助けをしたのだと解釈できる。このことは彼らのフレームワークを支持する報告であると言えよう。だが、質問紙法と面接法でフィードバックの効果の現れ方が異なるということもやはり彼らのフレームワークでは説明がつかないことである。今後はフィードバックを与える人物による圧力は確信度判断のどの過程に与えるのかを明らかにする必要がある。

### 総合考察

本研究における実験は、Wells and Bradfield (1998)の結果ならびにCharmanら(2010)のフレームワークを概ね支持する結果であった。実験1では確証的なフィードバックを受けた参加者は他の条件に比べて記憶の質を高く見積もった結果となった。この結果はフレームワークが予測する、内的手がかりの弱い参加者は外的手がかりであるフィードバックに依存する、ということをサポートするものである。実験

2における参加者の報告（「不安ながら選んで、あつて言われた安心感から、ものを見てる」）はこの実験1の結果を裏付けることとなった。しかし、実験2の面接を用いて回答を求める手法では実験1に比べて効果が弱まった。質問の回答を、面接者という回答を待つ相手がいると、質問紙に回答するのは違い自分のペースで回答出来ない、そして聞き返されたりする可能性がある。このような環境要因により、参加者は実際に持っていた確信度より控えめな回答をしたと推測する。

これまでのフィードバック効果研究で得られてきたほとんどの結果を、このフレームワークを用いて説明することが出来ると考えられるが、このフレームワークにはまだ検討されるべき点がある。例えば、先述した環境の要因はフレームワークでは考慮されておらず、この要因がフレームワークのどの段階に影響しているかは今後の検討が必要である。また、検索段階で得た外的手がかりが信念と合致するものであれば、その手がかりは確信度評価に統合され、信念と合致しない場合には評価に統合されないと Charman ら(2010)はしているが、この手がかりが統合されない場合は確信度評価が元々あったものと変わらないのか、それとも元々あった評価を低下させるのかを明らかにしていない。本研究の結果を見る限り、非確証的フィードバック条件と統制条件の間に有意差が見られた項目は殆どないため、手がかりが統合されない場合に確信度評価は元々参加者が持っていたものとほぼ変わらないといえよう。つまり、自らの識別を否定されたからといって評価を更に下げる訳ではなく、その否定を違和感なく受け入れたものと考えられる。

#### 参考文献

Bladfield, A. L., Wells, G. L., & Olson, E. A. (2002). The damaging effect of confirming feedback on the relation between eyewitness certainty and identification accuracy. *Journal of Applied Psychology, 87*, 112-120.

Charman, S. D., Carlucci, M., Vallano, J., & Gregory, A. H.(2010). The selective cue

integration framework : A theory of postidentification witness confidence assessment. *Journal of Experimental Psychology : Applied, 16*, 204-218.

- 巖島行雄, 丸山昌一, 藤田政博. (2005) 目撃証言への社会的影響; 推定変数とシステム変数からのアプローチ. *心理学評論, 48*, 258-273.
- Lampinen, J. M., Scott, J., Pratt, D., Leding, J. K., & Arnal, J. D. (2007). 'Good, you identified the suspect...but please ignore this feedback': Can warnings eliminate the effects of post-identification feedback? *Applied Cognitive Psychology, 21*, 1037-1056.
- Neuschatz, J. S., Lawson, D. S., Fairless, A. H., Powers, R. A., Neuschatz, J. S., Goodsell, C. A., et. al. (2007). The mitigating effects of suspicion on post-identification feedback effect and on retrospective eyewitness memory. *Law and Human Behavior, 31(3)*, 231-248.
- Rattner, A. (1988). Convicted but innocent : Wrongful conviction and the criminal justice system. *Law and Human Behavior, 12*, 283-293.
- Semmler, C., Brewer, N., & Wells, G. L. (2004). Effects of postidentification feedback on eyewitness identification and nonidentification. *Journal of Applied Psychology, 89*, 334-346.
- Skagerberg, E. M. & Wright, D. B. (2009) Susceptibility to postidentification feedback is affected by source credibility. *Applied Cognitive Psychology, 23*, 506-523.
- Wells, G. L. & Bradfield, A. L. (1998). "Good, you identified the suspect?" Feedback to eyewitnesses distorts their reports of the witnessing experience. *Journal of Applied Psychology, 83*, 360-376.